

巻頭随想 いま、伝えたいこと

（歴史研究）
七三三号（八月号）

戦死した父につき母から聴いたこと

京都産業大学名誉教授 所 功

八十年前の「終戦」当時、私は満三歳半であつたから、戦時中の記憶は全く無い。しかし、母は昭和十三年（一九三八）、父と結婚した日から簡単な日記を書き続けており、また、私の幼少期から折々に話してくれたことが沢山ある。

とりわけ大正元年（一九一二）岐阜県西部の山村農家に生まれた父（久雄）は、赤紙召集を受けて出征し、一年後の昭和十八年（一九四三）七月二十七日、ソロモン群島ニュージョージア島のムンダで戦死した（満30歳）。そのころの実情を母から聴いたことは、私の生き方・考え方に大きな意味をもっている。

父は召集令状が届いた時、「これで俺も国の為^にに働けるな。しっかり戦つてくるが、必ず生きて帰るから心配するな」と自らを鼓舞しながら、母を慰めたという。

しかしながら、すでに敗色の濃いムンダで艦砲特撃を受けて戦死を遂げた。丁度そのころ母は、二階から駆け降り、何か言つてサツと消えた夢を見て、目が覚めたという。

それから三ヶ月半後、女手一人の我が家で、親戚の応援をえて^{もみすり}糶^{もちすり}の最中、村役場勤めの僧侶から戦死公報が届けられた。それを手にした母（26歳）は、私（2歳直前）を抱いて、仏壇の前に座り込んだが、声を出して泣くことすらできず、作業に戻つたという。

その直後から小学校に上るまで、私は農繁期に母の里へ預けられ、かなり我俣に育つた。すると、母は私を仏壇の前に座らせ、「うちはみんなの世話になつてゐるのやから、迷惑かけるようなことを絶対するな」と厳しく叱つた。

また、小学校に入ってから、体の弱い私が喧嘩に敗けて帰ると、「功のことはいつでもどこでもお父ちゃんが見守つてゐるから大丈夫。こつこつ勉強を頑張れば誰かが認めてくださる。命懸けでやれば出来んことはないよ」と励してくれた。この言葉は本当に心強い。

父は姿が見えなくても、私を見守り（見張り）続けていてくれると思えば、決して道に外れたことはできず、自分なりに信念を貫けば誰かがわかってくれると信じてゐる。

ちなみに、父と同じ満三十歳となつた昭和四十七年（一九七二）七月、ソロモンの戦没地を訪ねたところ、奇しくも父の命日に遺品・遺骨と巡り会うことができた（拙著『靖国の祈り遙かに』神社新報社、平成十四年参照）。